

平成 26 年 2 月 5 日  
住友生命保険相互会社

## 受賞者決定のお知らせ

住友生命社会貢献事業

### 第 7 回『未来を強くする子育てプロジェクト』

～子育て支援 2 公募事業 受賞者決定～

子育て支援活動（一般部門及び震災復興応援特別賞部門） 16 組

女性研究者への支援 11 名

住友生命保険相互会社(代表取締役社長 佐藤義雄)では、平成 19 年からよりよい子育て環境の整備にむけた「未来を強くする子育てプロジェクト」に取り組んでおります。この一環として、「子育て支援活動の表彰」と「女性研究者への支援」の 2 つの公募事業を実施しており、これまで過去 6 回の表彰を通じて、49 組の子育て支援活動と 60 名の女性研究者への支援を行ってまいりました。第 7 回である本年度は、以下のとおり 16 組の子育て支援活動と 11 名の女性研究者への支援を決定いたしました。

#### 各事業の表彰概要

##### ◆子育て支援活動の表彰

子育て支援に資する諸活動を行っている個人・団体 160 組からご応募いただきました。活動のユニークさ、汎用性などを考慮したうえ、未来大賞 2 組、未来賞 10 組、震災復興応援特別賞 4 組の計 16 組を決定し、未来大賞には「特定非営利活動法人 沖縄ハンズオン NPO」と「特定非営利活動法人 Mama's Cafe」を選出しました。未来大賞には 100 万円、未来賞及び震災復興応援特別賞には 50 万円の副賞を今後の活動にお役立ていただきます。

また、未来大賞の「特定非営利活動法人 沖縄ハンズオン NPO」には文部科学大臣賞を、「特定非営利活動法人 Mama's Cafe」には厚生労働大臣賞が授与されます。

##### ◆女性研究者への支援

人文・社会科学分野を専攻し、現在子育て中でもある女性研究者 126 名の方からご応募いただきました。その中から「スミセイ女性研究者奨励賞」として 11 名の受賞者を決定。11 名の受賞者には、1 年間あたり上限 100 万円の研究助成金を最大 2 年間支給します。

また、表彰式を平成 26 年 2 月 24 日(月)にホテルニューオータニ東京にて開催いたします。  
各募集事業の概要・受賞者については、次頁の通りです。

## 【住友生命社会貢献事業『未来を強くする子育てプロジェクト』概要】

主 催:住友生命保険相互会社

後 援:文部科学省、厚生労働省

審 査 員:『未来を強くする子育てプロジェクト』選考委員会メンバー

選考委員長 しおみ としゆき 汐見 稔幸氏 (白梅学園大学学長)

選考委員 おおひなた まさみ 大日向 雅美氏 (恵泉女学園大学大学院教授)

おくやま ちづこ 奥山 千鶴子氏 (特定非営利活動法人びーのびーの理事長)

よねだ さちこ 米田 佐知子氏 (子どもの未来サポートオフィス代表)

はしもと まさひろ 橋本 雅博 (住友生命保険相互会社 代表取締役専務執行役員)

審査結果:

### ■子育て支援活動の表彰

募集内容: より良い子育て環境づくりに取り組む個人・団体を募集。規模は不問。各地域の参考になる特徴的な子育て支援活動を社会に広く紹介し、他地域への普及を促すことで、子育て環境を整備し、子育ての不安を払拭することを目的としています。

- 応募規定:
- ◆ 子育て支援に資する活動を継続的に行っていること。
  - ◆ 活動内容が社会に認められ、ロールモデルとなりうるものであること。
  - ◆ 活動の公表を了承していただける個人・団体であること。
  - ◆ 日本国内で活動している個人・団体であること。
  - ◆ 震災復興応援特別賞の対象については、東日本大震災の被災者の支援、復興のために子育て支援活動を行う個人・団体であること。

表 彰:【一般部門】12 組

- ◆ 文部科学大臣賞(未来大賞受賞者の1組に授与)／表彰状
- ◆ 厚生労働大臣賞(未来大賞受賞者の1組に授与)／表彰状
- ◆ 未来大賞 2組 /表彰状、副賞 100万円
- ◆ 未来賞 10組 /表彰状、副賞 50万円

【震災復興応援特別賞部門】4 組

- ◆ 震災復興応援特別賞 4組／表彰状、副賞 50万円

応 募 数:計 160 の団体ならびに個人

## ■女性研究者への支援

募集内容：“育児”のため研究の継続が困難となっている女性研究者及び育児を行いながら研究を続けている女性研究者が、研究環境や生活環境を維持・継続するために助成金を支給します。人文・社会科学分野における萌芽的な研究の発展に期待する助成です。

- 応募規定：
- ◆ 人文・社会科学分野の領域で、有意義な研究テーマを持っていること。
  - ◆ 原則、応募時点で未就学児（小学校就学前の児童）の育児を行っていること。
  - ◆ 原則、修士課程資格取得者または、博士課程在籍・資格取得者であること。
  - ◆ 2名以上の推薦者がいること（うち1名は、従事した、または従事する大学・研究所等の指導教官または所属長の推薦が必須）。
  - ◆ 現在、大学・研究所等に在籍しているか、その意向があること。
  - ◆ 支援を受ける年度に他の顕彰制度、助成制度で研究助成を受けていない方に限ります。（育児休業給付などは、研究助成に当たりません）
- ※この事業は、過去の実績ではなく、子育てをしながら研究者として成長していく方を支援したいと考えています。そのため、研究内容のみで判断することはありません。
- ※国籍は問いませんが、応募資料等への記載は日本語に限ります。

表彰「スミセイ女性研究者奨励賞」11名  
助成金として、1年間100万円(上限)を最大2年間支給します。  
支給期間は平成26年4月から平成28年3月までの2年間です。

応募数：計126名

## 【第7回『未来を強くする子育てプロジェクト』受賞者一覧】

(団体名・地域・活動内容、50音順、敬称略)

### ■子育て支援活動の表彰【一般部門】12組

#### ◆未来大賞 2組

##### 文部科学大臣賞

特定非営利活動法人 沖縄ハンズオン NPO (沖縄県沖縄市)

ユネスコによって絶滅危惧言語に指定された琉球諸語「しまくとぅば」の継承活動を展開。沖縄における重要な文化的アイデンティティである「しまくとぅば」を理解できない子どもたちが増えたことで、沖縄の伝統的な文化が廃れてしまうことを危惧し活動を開始。

普及のための取り組みとして、郷土史を題材にした紙芝居の作製・上演や沖縄の歴史・文化をテーマにしたラジオ番組の制作・放送を行っている。

「しまくとぅば」には、年上の人に対する敬意や感謝の気持ちを表した言葉が数多くあり、かつての子どもたちは、言葉から人との付き合い方を学んでおり、その意味でも、「しまくとぅば」を継承していくことは沖縄の文化を守るとともに、人としてあるべき生き方を受け継いでいくことでもあるとしている。



##### 厚生労働大臣賞

特定非営利活動法人 <sup>ま</sup>ま <sup>ず</sup> <sup>か</sup> <sup>ふ</sup> <sup>え</sup> Mama's Cafe (岐阜県多治見市)

同じ年齢の子どもを持つ5名のママたちで立ち上げた育児サークルとして活動を始め、参加者も増加していたが、社会情勢の変化や自身の就労のために退会を希望する参加者が徐々に増加。しかし、育児中のお母さんたちを雇ってくれる働き先がない状況の中、子どもを連れて働ける場を自分たちの手で作ろうと Mama's cafe の活動を開始。

カフェは乳幼児を連れてお母さん同士の交流の場にもなっており、子育て支援や母親の就労支援だけでなく地域の交流の場としての役割も担っている。



## ◆未来賞 10組

あーす べいびーず

### Earth Babies (岐阜県可児市)

居住者全体の 5.3%が外国人居住者である可児市で、日本人ママと外国人ママとの交流を通じて助け合える関係作りを目的に立ち上げた多文化共生育児サークル。

子育て世代の外国人の方にとって出産や子育てをしていく中で日本語や日本の風習が理解できずに苦労することも少なくないという実態がある。Earth Babies は日本人と外国人が双方向のコミュニケーションを通じて、地域住民としてお互いに尊重し合えるような関係が自然とうまれる機会を提供。また、そんな交流の中からそれぞれが持つスキルや言語力などの特技を活かし、子育て中でも積極的に社会参加ができるようなサポートも推進している。



### あそびのきち おひさま (岡山県総社市)

保育所の跡地を利用して、子どもたちに遊びと学びの場を提供している。祖父母と同居する家庭が多い地域特性から、活動開始当初は周囲からのニーズは少ないと思われていたが、実際には多くの児童が利用。また、お母さんたちにとっても交流と息抜きの場になっている。

0歳から小学生までを対象とした保育・託児事業、放課後子ども教室などを展開。障がいを持った子どもも積極的に受け入れている。多世代が集まる遊びと学びの場をつくり、異年齢の子どもたちが一緒に過ごすことで上級生が下級生の面倒をみるなど、良い効果を生み出している。



### 特定非営利活動法人 いこま山の子会「いこま山のようちえん」 (奈良県生駒市)

海外で行われている園舎を持たずに自然の中で保育を行う「森のようちえん」に感銘を受け、代表が独学で自由保育を実践する活動を開始。

「森のようちえん」では、野外だからといって、天候や季節によって活動を制限することはせず、子どもたちは森の中で自由に遊んでいる。こうした生きていく上で必要な力を身につけることも、自由教育・野外教育の大事な目的のひとつ。自然の中で行う「いこま山のようちえん」の運営にあたっては、地域の関係団体などとの協力が不可欠であり、地域全体で子育て環境整備に取り組んでいる。



## 特定非営利活動法人 輝け「いのち」ネットワーク (岩手県和賀郡西和賀町)

盛岡市内の児童養護施設の子どもたちへ夏休みの体験合宿の場を長く提供してきた中で、家庭や地域での生活経験をもっと提供してあげられたらと思っていた。

体験合宿をホームステイという形に発展させ、より密度の濃い生活体験と交流の機会の提供をはじめた。

都市部の児童養護施設の子どもたちを自然豊かな地域で住民ぐるみで受け入れることで、子どもたちにとっても、高齢者にとっても楽しい時間となっている。



## かこたむ Kacotam (北海道札幌市)

児童養護施設の子どもたちやひとり親家庭、生活保護世帯の子どもたち一人ひとりに寄り添った学習支援活動を展開している。

公共施設を借りて学習の場を提供するとともに、児童養護施設内での学習支援活動を継続して行っており、学習に対する興味や意欲を高めている。

先生役を務めるのは大学生・大学院生から社会人まで、専攻や職業も実にさまざまで、子どもたちにとっての良き相談相手としての役割も果たしている。



## 特定非営利活動法人 じゃぼん へあ どねーしょん あんど ちゃりていー Japan Hair Donation & Charity (大阪府大阪市)

美容師である代表が本業に寄り添った社会貢献活動を模索する中、海外では盛んに行われている「ヘアドネーション」という活動に出会い、日本でも広めたいという思いから活動を開始。「ヘアドネーション」とは医療用人毛カツラを作る材料となる人毛髪の寄付を募ることで、欧米諸国では認知度の高い活動であるものの、日本では一般の方から髪の毛の寄付を募っている団体は Japan Hair Donation&Charity 以外だけだと思われる。化学繊維などを使用した小児用ウィッグはカツラであることがすぐに分かってしまうために、子ども同士のいじめの原因になってしまうこともあり、そういった問題を解消するためにも人毛にこだわった医療用カツラの作製に取り組んでいる。



## NPO 法人 ホスピタル・プレイ協会 すべての子どもの遊びと支援を考える会（静岡県静岡市）

代表がイギリスを訪れた際に、病気や障がいを抱える子どもたちを遊びによって支援する「ホスピタル・プレイ」という活動に感銘を受け、国内での実践ならびに普及・啓発活動を開始。

子どもの成長過程において「遊び」は必要不可欠なもの。だが、病児や障がい児の場合、治療や入院を理由に遊びの重要性が軽視される傾向に疑問を感じ、「病気だからこそ遊びが必要」と考えている。

ホスピタル・プレイのさらなる発展を担う専門家人材育成も手掛け、これまでに 100 名以上の方が講座を修了し、各地で精力的に活動を行っている。



## パパちから応援隊（奈良県生駒郡平群町）

代表が母親向けの子育て支援活動を長く展開してきた中で、子育てのストレスは夫婦間の意思疎通が十分に図れていないことも原因であると考え、夫婦間のコミュニケーションを促すことで「夫婦力アップ」を目指し、活動を展開。

夫婦間の子育てに関する認識の違いを把握し、夫婦力アップに繋げるプログラムをもとにセミナーなどを開催している。

各参加者が日頃思っていることや感じていることを率直に語り合う中で、多様な夫婦のあり方や子育ての仕方を知る、といった“気づき”の場にもなっている。



## 播磨マリンクルー（兵庫県高砂市）

兵庫県高砂市には、播磨灘があるものの、工場地帯ということもあり、地域の子どもたちはそこに暮らす多様な生き物に触れる機会を持っていない。そうした地元の子どもたちに海に触れる機会を提供し、海の魅力を伝えるために「海」をテーマとした子どもたちの体験活動を開始。

地元の漁師さんをはじめ、さまざまな人たちの協力を得て、「アオサ取り」や「出前水族館」などの体験プログラムを実施。10年間で約3万人の子どもたちが体験し、多くの子どもたちに自然体験の機会を提供している。



## 守山商工会青年部（愛知県名古屋市）

地元の若手経営者を中心に構成される商工会青年部が、地域活性化のためには、子どもたちが元気であることが重要であると考え、子どもたちが楽しく元気になれるイベントとして「子ども商店街」を発案。今では、定員待ちがでるほどに。

「子ども商店街」では、青年部のメンバーも調整役として加わるものの、子どもたち自らがお店を企画し、利益確保の方法を考え、運営を行ってもらうなど、子どもたちの自主性を尊重している。

この活動を通じて、青年部メンバーと子どもたちが顔なじみとなり、地域全体での子育てという意識が広がってきている。



## ■子育て支援活動の表彰【震災復興応援特別賞部門】4組

### 特定非営利活動法人 移動保育プロジェクト （福島県郡山市）

東日本大震災以降、放射線量の高い地域では子どもたちが外遊びできない状況が続き、子どもだけでなく、親もストレスを感じていた。

そうした親子が抱える心身の負担を少しでも軽減したいとの思いから、移動保育「ポッケア」の活動を開始。

移動保育「ポッケア」では、毎週土曜日に日帰り遠足のようなスタイルで、福島県内の放射線量の高い地域に住む子どもたちをバスで放射線量の低い地域へ移動させ、1日保育を実践し、少しでも地域の親子のストレスを軽減しようと活動を続けている。



### 一般社団法人 にこにこサポート （宮城県仙台市）

子育て支援サービスの立ち上げ準備中に、東日本大震災が発生。震災直後からサポートを求める電話が殺到し、医療関係者や施設職員など、震災の中にあっても働かなければならなかったお母さんたちをサポート。また、活動拠点の近くの小学校が、避難場所になっていたこともあり、高齢者や外国人の支援も行っていた。

現在、カフェを併設した子育てサロンを活動拠点とし、子育て経験を持つ主婦を中心に保育士や幼稚園教諭の資格を持ったメンバーとともに、お母さん達が安心してらせる環境が、子どもの健やかな成長のためには、不可欠だと考えベビーシッターの派遣、託児サービスなどを展開している。



## Bond Born Café プロジェクトチーム (宮城県石巻市)

地域の子育てに関わる専門家が中心となり、支援の手の届きにくい「出産と子育ての環境整備」のを目的に本プロジェクトを開始。

子どもを持つ親、産科医、医師、行政の子育て関係者などさまざまなメンバーが集まり、「チーム」としてプロジェクトを企画・運営している。

震災後、各地の仮設集会場を移動しながら開催していたコミュニティカフェも定常的な拠点を確保することができ、お母さん同士のネットワーク作りに寄与している。



## みやぎくりはらこどもねっとわーく (宮城県栗原市)

平成 20 年の岩手・宮城内陸地震をきっかけに設立。数年の間に 2 度の大きな地震に見舞われたこの地域で子どもたちへの支援活動を行う。独自の視点から地域の人々の声をすくい上げ、子どもたちの心に寄り添った活動を展開している。

地域柄、昔から何かあった際にはみんなで助け合う意識が高いこともあり、メンバーはじめ地域の住民が協力し、「ちょうどいやんべな関係」を築き、市内の 2 つの地区で「くりはらあそびランド」を定期的で開催。加えて他の地区でも要請に応じて、読み聞かせや紙芝居、人形劇や工作などの楽しい催しを行っている。



■女性研究者への支援 11名 (氏名・所属・研究テーマ、50音順、敬称略)

- ・井岡 瑞日 (立命館大学・京都学園大学 非常勤講師)  
研究テーマ: フランスにおける家庭教育の歴史
- ・鄭 智允 (公益財団法人 地方自治総合研究所)  
研究テーマ: 地方自治・環境行政・廃棄物行政
- ・大門 碧 (京都大学 アフリカ地域研究資料センター)  
研究テーマ: アフリカ都市のポピュラー音楽消費からみる若者たちの社会関係: ウガンダの事例
- ・中野 千野 (早稲田大学大学院 日本語教育研究科)  
研究テーマ: 複数言語環境で成長するこどもの主体性を生かす日本語教育の研究
- ・南郷 晃子 (神戸大学大学院 異文化研究交流センター)  
研究テーマ: 近世期における武家権力と説話伝承
- ・二村 淳子 (東京大学大学院 総合文化研究科)  
研究テーマ: 描かれた女性像—20世紀初頭の東アジア人画家による女性表象—
- ・能美 由希子 (筑波大学大学院 人間総合科学研究科)  
研究テーマ: 難聴児が通常学級で学ぶための学習支援員の役割
- ・日笠 晴香 (東北大学大学院 文学研究科 文化科学専攻)  
研究テーマ: 医療における適切な意思決定プロセスに関する臨床倫理的視点からの研究
- ・八木 瑞香 (新潟大学大学院 現代社会文化研究科 共生文化研究専攻)  
研究テーマ: 19世紀フランス詩人シャルル・ボードレールの散文詩における詩的主体について
- ・山口 えり (早稲田大学 重点領域研究機構 東アジア「仏教」文明研究所)  
研究テーマ: 日本古代の国家と災害認識
- ・横田 和子 (早稲田大学 文学学術院)  
研究テーマ: 存在論的アプローチによる言語意識教育の実践をめぐる臨床的研究

以上